映評

『エーゲ海に捧ぐ』

この映画はまったくおもしろくない。筋は単純なので分かるのだが、映画の中に出てくる人間の感情が、よく分からなくて、人と人の関係が理解できなかったり、わけの分からない場面があったりする。監督をしてシナリオを書いている池田満寿夫は、自分は画家であるという自負のため、画面の美くしさだけを考えて、人間を映画の中で表現することを忘れているのではないかと思えてくる。

いったい人間を表現しようとしない映画にどんな価値があるのだろうか。どんなに美しいマネキンでも、だれもそれに恋をしないように、人間の感情を無視した画面に対して、だれも感動したりはしない。

池田満寿夫は、この映画をギリシャで撮影する時に、日本で上映されることを念頭において、なるべくせりふを少なくしたそうだが、それがまったく逆効果になって、わけの分からない映画になっている。

映画「エーゲ海に捧ぐ」は題名で分かるように、池田寿夫の小説「エーゲ海に捧ぐ」をもとにした映画だが、この小説をそのまま映画にしたのではなく、前半は「テーブルの下の婚礼」という小説の筋をつかっている。「テーブルの下の婚礼」も、もちろん池田満寿夫の小説だ。

池田満寿夫は小説の中で、セックスを題材に取り上げ、今までとまったくちがった、新しい感覚でそれを描いている。これまでの作家が、セックスを取り上げた時には、セックス＝性行為として描いて、それに付随する「さわりたい」とか「さわられたい」とか「見たい」「見せたい」という感情を無視、あるいは、異常視して来た。しかし、そういう感情は実際あるのだし、日常生活の中で普通に行なわれているものなのだ。池田満寿夫はそういう表実を、素直に描いているのだ。つまり池田は、セックスに付随するさまざまな感情、あるいは感覚を大きくクローアップし、セックスを性殖行為というより、むしろ日常生活における性的なイメージとして、それを小説の中で描いている。画家としての池田も同じで、日常生活の中の性的なイメージを描いている。

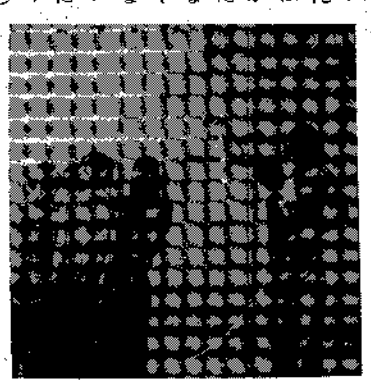
この「エーゲ海に捧ぐ」という映画の中でも、性的なイメージを描いているところがあったが、人間の感情がよく表現されていないために、よく理解できなかったり、時にはこっけいに見えたりしていた。たとえば男が女の股の間をのぞきながら、「子宮が見たい」と言う場面など、とっぴでわけが分からず、こっけいだったので館内に笑い声がおこっていた。

この映画は、原作が芥川賞をもらって有名であり、絵画界のシンデレラボーイといわれる池田満寿夫の監督した最初の映画ということで、前評判はかなり高かった。しかし、見てもよく分からないという意味で、失敗作だと言わざるえない。

レコード評

NATIVE SONZ

NATIVE SONのレコードが3月25日発売された。すでに聞かれた方も多いと思う。また昨年の大学祭では岡大JAZZ研究会主催によりコンサートも開かれている。私は岡大でのコンサート以前に四度NATIVE SONのライブに接している。広島。高円寺。日比谷。関学。中でも高円寺でのコンサートは、(上田正樹とPUSH&PULL)とのジャムセッションもあり最高だった。もちろん岡大でのコンサートも熱くHAPPYなものだった。(ライブテープをJAZZ研内のアブクが所有しています。御希望があればテープコンサートを開きますのでJAZZ研まで。グピングは不可)やはり本田のフィーリングがたまらないい。ジャズとしてNATIVE SONをどう見るかと言われるとあまりいい返事は出来そうにないが、そこん所を割り切ってしまえばナベサダなんぞメじゃない。ライブを聴いているとしだいにHOTに、HAPPYになって踊りたくなってくる。しかし、レコードについては多少不満がある。まずそういったライブな感じがあまり出ていないことだ。迫力がないというか洗練され過ぎた音になっている。色んな人から〝こじんまりしている〟とか〝きらきらしている〟等の評価を得ている。私もかまえて聞く気はしない、というのが本根だろう。BGMとしては最高だ。車でつっぱしりながら流すと、まさに翔んでるって感じにさせられるんじゃないじゃろか。ジャケットの中にもわけのわからぬことを書いてる変な紙が入ってるわ(俺らも原付でぶっとばしながら聞いてみたいわ)そんなに演奏は悪くないA―Iなんかいい線いってるし他にもいいドラックはある。しかし、なぜか愛着の持てぬレコードだ、たぶん原因は何万枚も売れたというポピラリティをこのレコードが持っているからだろう。他の、多くのクロスオーバーレコードの様に使い捨て時代の聞き捨てレコードという印象を受けた。NATIVE SONならもっとすばらしいレコードを創ることができると思うのだが!!



「ネイティブサン」
ビクター
VIJ―6301

書評

男が女を見つめる時

五木寛之

五木寛之は「男っぽい女の方が色っぽい」という。このパラドックスに私は真実の匂いを感じる。

「色気」とは不思議なものである。それ自体、官能的な響きをもってはいても、その価値は知性をけっしてぬきには考えられない。

「知性」は羞じらうものである。知的な女は子宮で生きることを羞じらう。子宮で生きる女は「女」の嫌らしさに無頓着である。しかし、知的な女は本能のあさましさに鈍感ではいられない。むしろ自分の内に存在するその嫌らしさを嫌悪し「女」そのものに羞じらってしまうのではないか。彼女の羞じらいはその嫌らしさを自己から抹消することにはじまる。それは「女」としてよりもむしろ「人間」として前向きに生きる行為となる。そしてその行為は世間で俗にいう「男っぽい」行為にちがいない。

しかし、彼女は「女」であって「男」ではない。しかも彼女が「女」である前に人間であろうとあがけばあがくほど彼女の内部で深くよどんだ「女」がいっきに凝縮され凄艶な色香を発散する。それはいたたしく不安定でなによりもみずみずしい。

五木寛之の目は内に秘めた感性の色香の魅力を透視しているのであろう。真に女らしい女、それは表面的に女が男に見せつけるたおやかさでもなく、甘さでもなく、感傷でもない。むしろ「女」そのものに甘えず「女」そのものに羞じらいそっぽをむき一途に生きている女の中に凝縮された真に女らしい「女」の姿を見いだすのであろう。

五木寛之は芸術を愛するように「男っぽい女」を愛する。「真に官能的な女、性的に卓越した女は、常に女性的ではない。」と彼はいう。なるほど、と私は思う。

書評

小説への序章

辻邦生

小説は……一体どこに行ってしまうのだろうか

かなり難解な語句に苦しみながら全部読み終えた時、落ち着いてはいられなかった。自分の今までの読書体験からいって、価値ある書物にめぐり逢った時というのは、その本を読み終えてもすぐに別な本を手に取ることができないのだ。キルケゴールの「死に至る病」の時もそうだった。その読後の余韻にしばらく身を任せていたい、と思う。しかしそういう心持ちになるのは滅多にないことで、大抵は読み終えた勢いで次の本を読み始めてしまう。そういう本は価値がない、というわけではないのだが。

読み終えて落ち着かないというのは、確かに感銘を覚えつつ読んだのだが、ちっとも全体がつかめないことで焦っているのだ。読解力が乏しいせいだ、とは思うのだが、どうもそれだけじゃないような気がする。読みづらい本だったけど、読んでいる時点では理解していたつもりなのに、全体を把えようとすると、ハテ？となる。いろんな疑問が湧きあふれちびっでくる。

一体小説はどこに行ってしまうのだろうか。「主体と外界の対立」を克服し「外界を主体の意味として取り込む」ことはどういった手続を要するのだろうか。

「神々の死」と著者は事もなげにのたまうが、本当に理性は神々を抵殺し得たのだろうか。「神なき終末」など考えられるだろうか。「ヨハネ黙示録」を現在の状況と符合させておきながら、ニヒリズムの「目標も意味もない全き終末」を持ち出してくるのは何故だろう。……等々。

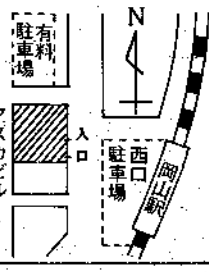
こういった疑問は既に本書において解決されている筈なのだから愚問にすぎない。しかし、愚問に取りつかれて焦っている自分を鎮めるためにも繰り返し本書を読む必要がある。

読書百遍、と言うが、そういう書物もなかなかないものだ。

この本は、商業ジャーナリズムの拡大によって卑俗化した文学を楽しく読まれている方には勧めたくない。

(中公文庫)

むかし1馬力、今100馬力
それに適応する脳力を、今の10倍に
高めるために密教ヨガで!!
山陽ヨガ健康センター
本部　岡山市錦町3の7
TELEPHON 32―7635

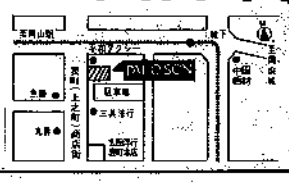


同窓会・歓送迎会
お慶び・法事…等宴会場
備前米のおいしい店
回転寿司 チェーン店
ファミリーレストラン
飛鳥(あすか)
☎52-4151

Book Store
㈲市川文昌堂
(市川書店)
文庫　辞書　文具
本店：西奉還町通り　52―2690
支店：北長瀬 大安寺高校前　54―3716

●学生割引の店
取扱品 ソニー・ビクター・ナショナル・シャープ
パイオニア・トリオ・アイワ・他
岡山市津島南町1丁目1―27
伊島ショッピングセンター・アイアイ2F
木下ラジオ津島店
岡山弘電店
TEL 53―8393

ジーンズ ショップ
アメリカヤ
ところ　奉還町商店街入口
でんわ　(53)2881代表

オーディオ専門店が表町にオープンしております
世界のオーディオ
PATIO―SON

ステレオの事ならラジカセから高級オーディオまでおまかせ下さい
パティオソン／太田洋行電機部
岡山市表町一丁目表町入口
TEL (0862) 32―9355